

Eureka VI

六年制通信 No. 26 平成30年12月15日(土)号

昼寝をする亀

どういうわけか慶応三年生まれには、後世に名を残す偉人が多いですね。夏目漱石、正岡子規、秋山真之、幸田露伴、南方熊楠、豊田佐吉、そして上田萬年。上田萬年は「かずとし」なのですが、ご自分では「まんねん」と言っておられたらしい。源氏物語を翻訳された円地文子さんのお父上です。まだ東大に言語学という講座がないころの先生で、近年『日本語をつくった男 上田萬年とその時代』(山口謠司 集英社インターナショナル)が出て少し話題になりました。その上田先生が今から百年以上前にイソップ物語を訳されています。『新譯伊蘇普物語』がそれですが、現在は、はる書房の世界名作名訳シリーズとして入手できます。その第百六(下巻 p.91)に「兎と亀」の物語が収められています。皆さんもよく知っているお話でしょう。のろまな亀を兎が笑うのですが、ようし、それなら山のふもとまで競争だと、戦いを挑むのは亀の方なのですが、余裕の兎が途中で昼寝をしてしまい、最後は亀が勝つ、ああ、楽勝だと思っても油断してはいけない、という教訓ですよ。上田先生の訳で私の好きな箇所は、兎が寝ている「その間、亀は少しも休まず、ネチネチと歩いていきましたが…」という、亀の歩みを「ネチネチ」と表現しているところです。「ヨチヨチ」とか「ノロノロ」ならわかるのですが「ネチネチ」と書くと、何やら亀の根性がいやらしく聞こえませんか。面白いですね。物語の後に先生の、本文より長い解説があるのですが、その中に「学校においても、終局の勝利を得るものは、決して才気の鋭い少年ではなく、かえって、遅鈍ながらも忍耐力の強い生徒なのです。彫刻家の評価は、鑿(のみ)の使い方が迅いからというわけではなく、作り上げた美術品の出来栄えによるのです」とあります。もちろん忍耐強い兎が休まずに頑張れば、もっと完全な成功を収められるとも言っておられます。それは、その通りですよ。

人はそれぞれ理解するスピードが違いますから、遅い人はついつい歩みを止めてしまいます。次から次へと理解していく人に劣等感を持ってしまいうしね。自分はどうも勉強には向いていないのではないかと、言い訳だと自覚しつつも、そう考えてしまいがちです。でも、亀のように、粘り強く諦めないで歩いていけば大丈夫、イソップの寓話はそう言っているわけです。亀はむしろ自分から兎に挑んでいるわけだし。

しかし、ここで忘れてはいけないのは、この寓話には受験勉強にとって大切な指標が抜けているということです。それは時間軸です。山のふもとまでの競争には、どちらが先に到着するかという観点しかありません。何時までに到着できるかという競争ではないのです。もし、時間を区切られていたら、兎は昼寝をしたでしょうか。亀

は兎に勝てたのでしょうか。兎は亀など気にしなかったのではないのでしょうか。

受験は時間との闘いです。ふもとまでの道の両脇にはいろんな進路先があるのですが、君の望む入口はふもとにある、そんな感じですね。君がもし亀なら、競争相手は兎ではなく時間です。一定の時間にたどり着けるか、勝負はその一点だけです。受験が一種のゲームだというのはそういうことです。当然ながら、兎にも亀にも同じだけの時間が与えられています。もし君が兎で、そして亀と同じだけ与えられている時間を全力で駆ければ、亀がふもとに着くころには山の頂上に行けるかもしれません。

ではノロマな亀はどうしたらいいのでしょうか。どうすれば、望む場所へたどり着けるのでしょうか。それは簡単なことです。スタート時間を早めればいい。自分で持ち時間を増やせばいいのです。「あと2年しかない」を「あと3年ある」にするには1年早く歩き出せばいい。誰にでもできることです。しかし、自分は兎ではなく亀だという自覚を持ちながら、歩き出すのが遅い人がいます。歩き出したとしても、途中で昼寝をしてしまう亀もいます。兎だから昼寝をしても様になりましたが、昼寝をする亀ではいけませんね。ただし、受験勉強に関しての話ですよ。

何度も言いますが、受験がゴールではありません。大学を出てもずっと学び続けるべきです。そしてその時は、昼寝をする亀でいいのです。歩みを止めることさえしなければいいのです。昼寝をする亀なんて、素敵でしょ。

しかし今は仕方がない。時間軸を意識して、はじめの一步を踏み出しましょう。

今週のおすすめ

・映画 『心の旅路』 原作はジェイムズ・ヒルトン（角川文庫）

今回は映画です。ヒルトンで有名なのは『チップス先生さようなら』ですが、正直に言うと私は原作も映画も面白いとは思わなかった。『心の旅路』はエンディングがいいですね。メリル・ストリープの『恋におちて』のラストシーンを思い出します。そういえば、グリア・ガースンという女優さんとメリル・ストリープは似ていますね。

原作の翻訳は読みにくく、内容もやや冗漫なので映画を観れば十分だと思います。戦争で砲撃を受け記憶喪失になった男チャールズと、彼を愛した踊り子ポーラの物語。幸せに暮らす二人に悲劇が訪れます。男が交通事故に遭い、再び記憶を失うのです。ポーラと暮らした日々の記憶をなくしてしまうわけですが、同時に昔の記憶を取り戻すのですね。ポーラにしてみれば夫が急に行方不明となり、チャールズの実家では戦争で死んだと思っていた跡取り息子が帰ってくるという、意外な展開になります。その後事業に成功したチャールズのもとへ秘書としてやってきたのが…。

この物語は、原作を **Random Harvest**（でたらめな収穫）と言うのですが、記憶がなくなったり戻ったりすることを言っているのでしょうか。私にはポーラの一途な献身の物語に思え、強く印象に残った作品です。グリア・ガースンさんの気品にあふれる演技も美しい。若い君たちがこういう映画をどう感じるのか興味があるなあ。冬休みにでもご家族でどうぞ。感想を聞かせてくれると嬉しいです。

BGMはフランシス・レイの *ある愛の詩* でした…。